

令和2年度 ふるさと教育推進事業

益田教育事務所管内

特色あるふるさと教育事例

学校名	益田市立 匹見小学校		
学年	主な教科等	主に関わる単元名	ふるさと教育の視点
全	生活科 図工 総合	「みんなの想火」プロジェクト	地域の資源(ひと・もの・こと)を生かして、家庭と地域と学校が一体となる
<p>1 特色ある取組の概要</p> <p>《取組の流れ》</p> <p>◆コロナ禍の中、地域の大人(小・中学校、保育園、保護者、公民館、地域の大人…)達が集い、地域が盛り上がり、楽しくできる活動について考えた。◆その中で、地域の方から、「竹林が多くなった【竹】を用いて、まちに火を灯しては…」という意見がでた。◆この意見は、昨年度5・6年生が3学期に取り組んでいた「匹見ブランド再発見PJ」の中で、その方が言われていた内容であったが、緊急事態宣言で学校が休業に入り、実現には至らなかった。◆それに関して、ちょうど益田で竹灯籠を作成し、7月に全国で竹灯籠の火を灯して繋がるというイベントに参画される方がおられたので、その活動とつなげ、実現できないかという話になった。◆学校運営協議会等、話し合いの場をさらに発展させながら、竹の伐採についての環境学習や、竹灯籠のデザインや電動ドリルを使っての竹灯籠の作成など、「みんなの想火PJ」という単元名で、小・中学校とも教育過程に位置づけて、地域を巻き込んで実施していく流れになった。</p>  <p>2 各校のふるさと教育のねらいを達成するための授業(活動)のポイント(工夫)</p> <p>■多様な「ひと」の巻き込み</p> <p>○地域の資源を3つの匹魅力「人(◎と)」、「木(◎)」、「水(◎ず)」と位置づけ、そのうちの「木(竹)」を用いて、「竹灯籠」を作成し、みんなの想いを集めて形にすることで、<u>たくさん人の繋がり</u>をつくる。</p> <p>○竹灯籠の作成にあたっては、作成する大人が中学生に、それを学んだ中学生が小学生に…という流れで、<u>学びの繋がり</u>を意図的につくる。デザイン作成の際は、明誠高校キャリアサポートの高校生も一緒に活動した。(低学年や保育園児は、竹に色を塗ったり、飾りを作ったりし、活動の繋がりをつくる。)</p> <p>■公民館活動や地域との連携協働</p> <p>○竹の切り出しや、竹灯籠制作など、事前の準備計画等、公民館、地域の方が協力しながら実施。想火PJ点灯式当日には、保護者の方も協力し、竹を活用して、保・小・中、大人の願いを書いた短冊をつけて飾ったり、竹ご飯を炊いたり、灯籠以外にも<u>自然の(竹)の魅力</u>を感じた。また、キャリアサポートでつながった高校生3名も当日、自主的に参加していた。</p>  <p>○オンラインで全国の竹灯籠の灯と繋がることで、コロナ禍の中、全国の「想火PJ」参加者の想いを一つにし、<u>これからできることを考える</u>時間とした。</p> <p>3 児童・生徒に見られた変容(どのような力が身についたか等)</p> <p>○主に小・中学生が1つの活動に向かって動き出すことで、地域を巻き込み、達成感を皆で味わえる活動となり、地域の行事やイベントに、より主体的に参画していく姿がみられた。</p> <p>○今後、匹魅力の中の匹見の「水」や「ひと」も生かしつつ、コロナ禍の中でも<u>発信</u>し続けようとする活動に発展しようとしている。</p>			

学校名	益田市立豊川学校		
学年	主な教科等	主に関わる単元名	ふるさと教育の視点
5・6	国語 社会科 総合	豊川の魅力で笑顔にしよう	地域の魅力を再発見・発信

1 特色ある取組の概要

■小学校5・6年生が、豊川地域の方に元気を届けたり、自分たちの考えを提案したりして、魅力を再発見していく。

《取組の流れ》

(1) 告知放送ジャック計画

(夏休み…「すたでいスペースとよかわ」)

(2) ユタラボとの「対話」の時間 (合計3回)

・子ども達との対話を通し、まちづくり計画をブラッシュアップ

(3) 「豊川のまちづくりを計画しよう！」

・豊川安心安全まちづくりプランを作成

(4) 中世益田発祥の地「豊川」を感じる

・自分たちの願いを実現し、地域の人に魅力を届けたり、一緒に魅力を再発見したりする。



2 各校のふるさと教育のねらいを達成するための授業(活動)のポイント(工夫)

■多様な「ひと・こと」の巻き込み…コロナ禍で学校が休校の際には、告知放送を使って地域の大人に元気な声を届け、繋がりを意識した。学校が再開してからは、ユタラボや地域の方(河野議員や公民館長、主事さん…)にまちづくりプランを提案し、実際に関わりながら活動し始める。その中で、児童がそれぞれ「ひと・こと」を絡めながら、探究的に学習し、様々な活動の中で大人達と一緒に願いを実現していった。



■公民館活動との連携協働…夏休みの「すたでいスペースとよかわ」では、公民館やユタラボ、他公民館と連携しながら、川遊びやハンドメイド教室、オンラインで水引き教室などを実施した。子ども達のまちづくりプランにある内容もいくつか実現していき、子ども達の自己有用感や達成感を感じることができた。



3 児童・生徒に見られた変容(どのような力が身についたか等)

■「ひと・もの・こと」との出会いによって変化した点を中心に

- ひと**…様々な活動の中で、地域の大人、公民館、保育園、ユタラボ、社会教育コーディネーター等多くの大人が関わり合った。また、コロナ禍の休校中の際は、校内のオンラインで友達同士で繋がる活動に始まり、他校の児童とオンラインで関わる活動も多く取り入れ、人とつながる大切さを感じ取れた。
- もの**…豊川のお茶&クッキー、水引き、とよかわゴン、とよかわの家、伝統芸能(太鼓)、歴史遺産…等、さまざまな魅力あるものを実際の体感し、その魅力を再確認した。
- こと**…「中世益田発祥の地【豊川】を感じる」のイベントを「とよかわの家」で行った際には沢山の地域の方が来られ、多くの笑顔が見られた。子ども達のいきいきとした発表や活動の様子は大人と一緒に盛りたいという思いが伝わってくるものであった。

特色あるふるさと教育事例

学校名	益田市立益田東中学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
2	総合	6 (ロー) カルプロジェクト	公民館を中心とした地域活動の体験や交流をとおして、活動意義や内容、想いを理解し、地域の方々と繋がることで、地域への愛着を深め、地域に貢献する態度を養う。

①取組の概要

■地域における公民館の役割を理解し、地域活動を実際に体験することで、地域活動の充実のために、自分たちができることを考える。また、次年度の益田東中学校区（益田地区・豊川地区・真砂地区）の地域資源を知り、活用する視点を持つとともに、地域の方々や園児・小学生と繋がる喜びを感じる。

《取組の流れ》

7月～公民館オリエンテーション（10日）、公民館プレゼン合戦（16日）、公民館体験①（27日）

8月～長期休業中の各地区のイベント等体験（有志）

9月～真砂地区研修（16日）

10月～公民館体験②（15日）、プレ提案発表（26日）

11月～文化祭でのステージ発表（7日）…提案発表資料を各公民館で展示

12月、1月～冬季休業中の各地区のイベント等体験（有志）、学年リーダー研修（1/5）

～次年度（3年次）の11月文化祭までのプロジェクト

②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

■多様な「ひと」の巻き込み…

各地区保育園（所）、つろうて子育て協議会の方々、食改の方々、まちづくりの会、益田公民館豊川公民館、真砂公民館、各地区出身の高校生、

■公民館との連携協働…

○中学校学年部と共に、事前協議を各地区公民館と重ね、「授業で学ばせたいこと」と「地域で取り組みたいこと（特に中学生と）」が重なる部分を探り、お互いに「やりたい」部分を明確にしてからスタートした。

○放課後祝日、長期休業時の各公民館のイチオシの活動を定期的・積極的にインフォメーションしてもらった。中学校の後押しもあって、有志の活動に参加する生徒も多数いた。その生徒たちが学習活動の中でも主体的に活動する姿が印象的であった。



③児童・生徒に見られた変容

■特に、ひととの出会いによって変化した点を中心に

○日常的に公民館に立ち寄り、地域活動に積極的に出かける中学生の姿が見られる。

○中学校の教員に対してはもちろん、地域の大人に対しても自分（自分たち）の意見やアイデアを伝

える等、様々な場面において「学び」に向かう主体性の高まりを感じられる。

○他教科（国語科・理科・家庭科・社会科・数学科）横断的に学習内容が組み込まれていたため、それぞれ

れの教科学習時間においても、学びを関連させながら意欲的に取り組む生徒の姿が見られた。

○中学生の提案発表を各地区の小学校教員・児童が聞いたり、逆に小学生のプロジェクト学習の成果物を中学校教諭・生徒に共有したことによって、互いに刺激を受け、より深く学ぼうという姿勢が感じられる。また、小学校の保・小の積み重ねを意識した中学校教諭の発問や学習内容の編成が、子どもたちの姿勢に良い影響を与えている。



特色あるふるさと教育事例

学校名	津和野町立木部小学校		
学年	主な教科等	主に関わる単元名	ふるさと教育の視点
5, 6	総合的な学習の時間	応援せよ！津和野のすごい人 ～ふれあい食堂 In きべ、木部、KIBE～	地域住民や高校生との活動や対話を通して、ふるさと木部を見つめ直したり、様々な課題を解決していく方法などについて共に考えたりする。

1 特色ある取組の概要

木部小学校の「総合的な学習の時間」と津和野高校の「総合的な探求の時間」の相互での接続を図り、連携して「食と学びの子ども広場」（町主催の0歳児からのひとづくり事業の一環として推進している居場所づくりの取組）の企画及び実施に向けた取り組みを行う。

木部小学校出身の子どもたちが中学生・高校生になっても地域とつながり続けるきっかけとして食を通じたふれあいの場をつくる。（多世代がふれあい・言葉を交わし・つながる場をつくる）ことを目的に「ふれあい食堂inきべ、木部、KIBE」を開催することとした。木部小出身の子どもたちが高校の総合探求を進める高校生4名が、木部小学校を5回にわたり訪問し、アイデア出しや意見交換を行いながら準備を進める。

午前中は、5、6年以下の子どもたちと高校生や地域の大人と触れ合える場づくりを行い、並行して、5、6年児童と保護者でカレーづくりを行う。できあがったカレーは、食材を提供していただいた方や普段お世話になっている地域の方を招待し振る舞う。午後からは、小学生と高校生で考えた参加者全員が触れ合える場づくりを考えた。



2 各校のふるさと教育のねらいを達成するための授業（活動）のポイント（工夫）

- ・小規模校ということもあり、普段から地域の大人とのつながりは強い学校であるが、小規模であるが故に大人も含めた関わる人が少数かつ限定的になっているのも否めない。そこで、高校生とともに活動することで、子どもたちにとってより多様な価値に触れたり、ロールモデルと出会ったりすることができる機会とした。
- ・カレーづくりで使用する食材はすべて地元の食材を使用することとした。食材の提供者を自分たちで探し、直接お願いすることで、自分たちが取り組んでいこうとするプロジェクトの思いを届けるとともに、地域の生産者の思いにも触れることができるようにした。
- ・活動の進捗状況だけでなく、授業のねらいや子どもたちの学びを中心とした振り返りや情報共有を学級担任、小中魅力化コーディネーターと高校魅力化コーディネーターとの間で丁寧に行い、授業を通して身につけさせたい力だけでなく、0歳児からのひとづくり事業として育てたい力との関連を持たせながら臨機応変に小学生と高校生・地域とのマッチングやサポート、場の設定を行なった。

3 児童・生徒に見られた変容

- ・高校生の言動を参考にしながらこれまで以上に積極的に活動しようとする姿が見られるなど、普段関わることのない高校生との活動は子どもたちにとってよい刺激となったと考えられる。



特色あるふるさと教育事例

学校名	津和野町立津和野中学校		
学年	主な教科等	主に関わる単元名	ふるさと教育の視点
2, 3	総合的な学習の時間	出会いと対話から自分に気づく ～ツワトーク～	地域の様々な「ひと」との対話を通して、地域に対する思いとともに多様な価値観に触れる。
<p>1 特色ある取組の概要</p> <p>ふるさと教育とキャリア教育を一体に捉え、様々な立場の「ひと」との対話を通して、地域に対する思いや一人の大人としての生き方や考え方についての話をしたり、聞いたりすることで、多様な価値観に触れる機会とする。</p> <p>2学期に、2年生、3年生を対象に実施。様々な年代、職種、属性の大人が集まり、中学生との1対1の対話を行う。大人の関わり方が学習を深めるポイントとなるため、事前にツワトーク参加についてのオリエンテーションを含めた研修を開催。大人にとっても中学生との対話や事前の準備が自己を振り返る機会となり、大人にとっての学びの場として本単元を捉える。</p> <p>大人とのツワトーク後、3年生が小学生と1対1で対話をする。小中ツワトークを実施。同じ「卒業」という目標に向かい、学校生活の締めくくりを行う立場同士、これから大事にしていきたいことを話し合ったり、中学校生活への安心と希望を与える先輩からのアドバイスをしたりした。また、2年生については、3学期に津和野高校生と1対1で対話する「中高ツワトーク」を実施。高校生が自身の中学校生活での学びや高校生活について話をするすることで、中学校生活のラスト1年に対する意気込みや進学に向けての気持ちを高めたりすることができた。</p> <p>2 各校のふるさと教育のねらいを達成するための授業（活動）のポイント（工夫）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度初めに教職員対象に対話のワークショップを開催し、対話を通して自己を見つめることを体感するとともに、子どもに身につけさせたい力をどのような場面で、どのように学ばせるかを意識しながら指導計画を立てた。 ・大人の関わり方について事前の研修を行い、授業のねらいを共有した。 ・1回のイベントで終わるのではなく、子どもたちの学びのつながり、発展を意識した指導計画を立てる（大人との対話→小学生・高校生との対話） ・生徒の感想だけでなく、生徒にとってどのような学びがあったのか伝えることで、大人の関わりに対する価値づけを行う。 ・地域に対する思いを高め、やってみたいと感じた生徒に対して、魅力化コーディネーターや公民館が伴走し、学びのフィールドを地域へ広げるサポートを行う。 ・津和野高校出身の大学生にも参加してもらうことで、高校生にとっての学びの場をするとともに、多様性の幅を広げる。 <p>3 児童・生徒に見られた変容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生版マイプロとして、地域課題に対して自分なりのチャレンジに取り組む姿が見られた。 ・多様な価値に触れることで、より深く自分自身について振り返る場面が増えた。 			



特色あるふるさと教育事例

学校名	吉賀町立 六日市小学校		
学年	主な教科等	主に関わる単元名	ふるさと教育の視点
3	総合	896プロジェクト	ふるさとに愛着をもち、貢献する意欲を育む

1 特色ある取組の概要

吉賀町に伝わるやくろ鹿伝説をやくろ鹿に関係する地域講師から話を聞いたり、関係する場所を巡ったり、本を読んだりして調べた。その後、やくろ鹿をPRする活動を行った。劇、キャラクター・キーホルダー・ポスター・CM作製等を行い、校内や保育所、地域に向けて発信した。

2 各校のふるさと教育のねらいを達成するための授業（活動）のポイント（工夫）

やくろ鹿伝説に関係する団体（「やくろ太鼓」「やくろ鹿から吉賀を知る会」「抜月神楽」）や町内を基点に活動するデザイナー等、多くの地域の大人と関わらせた。

特に、「やくろ鹿から吉賀を知る会」のメンバーとの関わりが、児童のやくろ鹿を広めようという課題意識を高めるポイントとなった。

3 児童・生徒に見られた変容（どのような力が身についたか等）

単元後にとった児童アンケートの記述によると、「考える力」「伝える力」「やりぬく力」「友達と協力する力」が身についた。「もっとやくろ鹿を広めたい」「もう少しできることがあると思う」等、単元後も課題意識を継続して持っている児童も見られた。

PRする方法を自分達で考え、実際に実行したことで、達成感・自己有用感を得た児童が多く見られた。児童の姿から、地域の大人達と関わりながらやくろ鹿を知り、PRする活動を通して、ふるさとへの愛着をもち、貢献しようとする意欲を育むことができた。

（六日市保育所でのPR活動）



（デザイナーと協力して作成したキーホルダー）



特色あるふるさと教育事例

学校名	吉賀町立 柿木中学校		
学年	主な教科等	主に関わる単元名	ふるさと教育の視点
全	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の時間 ・学校行事 ・生徒会活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験学習（職業講話） ・野外活動 ・「竹灯籠で棚田をPRしよう」 	【地域に貢献しようとする意欲喚起】 ふるさとへの愛着を高め、地域と自分の「今とこれから」を考える。

1 特色ある取組の概要

- 新型コロナウイルスの影響で校外での体験活動を取りやめ、講話を中心とした体験学習を8回計画した。【右表：講師一覧】
- 三密を避けた野外活動を実施して、ふるさとの豊かな自然を体感した。
- 地域行事の中止でボランティアの場を失ったため、生徒会が中心となって自分たちにできる貢献活動（竹灯籠の設置）を考えた。

手づくり自治区柿木村（まちづくり担当者）
NPOエコビレッジかきのきむら（アルミ缶搬出）
柿木公民館（学社連携）
食生活改善推進協議会（料理教室、差し入れ）
吉賀町役場産業課（林業の現状と展望）
島根大学生物資源科学部（吉賀町出身、有機農業）
吉賀町役場産業課（鳥獣との共存）
京都大学（環境DNA、高津川の生物多様性）

2 ふるさと教育のねらいを達成するための授業（活動）のポイント（工夫）

- 吉賀町が取り組む「サクラマスプロジェクト【下記参照】」の趣旨に則り、有機農業・野生生物との共存など多様な視点の講話を取り入れ、ふるさとで暮らすアイデアや起業精神を養おうと考えた。

サクラマスプロジェクトとは、ふるさとでの豊かな体験や学びを元に、いつの日かふるさと吉賀町を支える人材（財）に育ててほしいという願いを込め、学校・家庭・地域が連携して子どもを育てる取組。



- 地域の強みや課題を把握し、「我がこと」として提案内容を考える探求的学習とした。
- 野外活動では、講話の内容と連動した環境教育（森林資源の活用）の視点で、ロケットストーブ【右写真及び下記参照】を用いた調理に取り組んだ。

ロケットストーブとは、木の端材を燃料とする持ち運び可能な加熱器具。本校では災害時も想定して14台を自作し、端材の薪と一緒に備えている。



- まとめる力・表現力の育成を目指し、文化祭では全校生徒22名を2グループに分けて提案発表と演劇に取り組み、全員が「我がこと」として発表と向き合った。



講話のようす(食改さん) ロケットストーブで調理 文化祭は全員ステージに 棚田入口に竹灯籠を設置

3 児童・生徒に見られた変容（どのような力が身についたか等）

- 2学期末に実施した生徒自己評価「授業や体験学習を通して将来の自分の姿について考えた」の回答のうち、「とてもそう思う」が昨年度と比較して3年生：35%→60%、2年生：0%→25%に向上した。
- 3年生は自己評価「毎日の清掃やボランティア活動に意欲的に取り組んだ」の「とてもそう思う」も、42%→60%に向上した。また、校内弁論や地域のシンポジウムで「いつかふるさとのために働きたい」と語る生徒もいた。



夜はLEDで光る竹灯籠